



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

CITATION:

雑報. 天界 1921, 1(12): 248-249

ISSUE DATE:

1921-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159628>

RIGHT:

雜報

●大彗星か新星か？

去る八月七日

附で、左の如き珍奇な電報が、米國リック天文臺から世界各國に送られた

“Starlike object certainly brighter than Venus three degrees east one degree south of Sun seen seven minutes before and at sunset by naked eye five observers set behind low clouds unquestionably celestial object chances favor nucleus bright comet less probably nova.”

之れを直譯して見れば「確かに金星以上に輝いた星らしいものが、太陽の東三度で南一度のところに、日没前と日没後に七分時間見え、五人が肉眼で見た、低い雲の後ろに沈んだ、天體には違ひない、多分、核の輝いた彗星だらう、恐らく新星ではあるまい」といふので、誰でも此れを見た者は驚いた。しかし電文が餘り簡單なものと、事實が餘り突飛なもので、殆んど誰も、何のことやら、さつぱり見當が付かなかつた。しかるに近頃英國の雜誌が到着して、漸く真相に關する手がかりを得た。それによると、八月七日の夕、米國リック天文臺長カンベル氏は同夫人及び三人の來客（其の中にはプリンストン大學天文臺長H N ラッセル氏も居た）と共に、家の露臺から珍らしい日没を眺めてゐた。すると一人の客

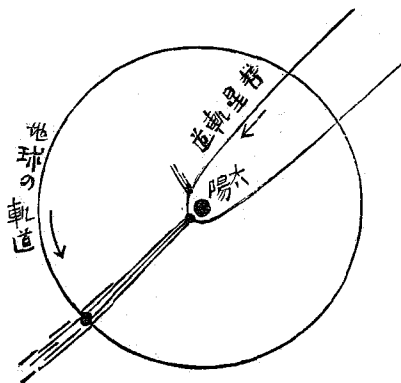
が、ふと太陽の傍に星が見えるに注意した。しかるに他の客達は其れを今少し以前から知つてゐたけれど、別に珍らしい程でもないよく知られてゐる星だらうと思つて、氣にも止めなかつたと言つた。カンベル氏は双眼鏡で數秒時間之れを眺めたが、間もなく雲の中に入つてしまつた。五人の一致するところでは、此れは確かに天體らしいといふのであつた。双眼鏡で見ては肉眼で見ると大して違ひは無かつた。位置は太陽の下で、位置角は垂直線から左へ四十五度あり、距離は太陽直徑の六倍あつた。カンベル氏とラッセル氏とは金星が此の場所に來たときよりも、今の星の方が光が大きいと思つた。若し之れが一八一八年六月に蠶座に現れたと同じやうな新星であるならば、光輝はあの場合よりも遙かに大きいものとなる。若し彗星だとしても、軌道が全然不明なので、其の位置を豫知するためには、尙もつと多くの觀測が必要である。八月七日夜以後、觀測者達は毎夜、日没から日出までかゝつて、空を搜したが、遂に何も見えず、不成功に終つたといふ。

ところが、英國スタフオードのウォルザアハンプトン（バアミンガム市の西北約十里）のフエロウス（S. Felloes）氏が次のやうな事を報告した。日曜（八月七日）の夕方八時半頃丁度今太陽が没したあたり、空が大へんよく澄んでゐるので、木星と土星が見へるだらうと思つて、私は双眼鏡（三倍の）を取つて搜し始めた。すると、まもなく光つたものが一つ見えたので、其時すぐ之れは木星だと思ひましたが、次の瞬間に、之れは遊星では無い、又、恒星でもないと思つた。それは太陽の方向へ長細くて、色は明かに赤かつた。太陽からは六度ほど距離があつて、少しく南寄りだと思つた。餘り低くて、望遠鏡を向けることが出来なかつたのが残念であつた。私は三分間ほど眺めてゐたが、其の後雲がかくしてしまつた。若し之れがアメリカで見えたものと同じもので、又、私の位置推定が正しいと假定すれば、此の天體は五六時間の間に、三度ほど太陽に近いたことになる。光も亦急激に増したらしい、私が見た時は、とても金星には及ばないと思つたから。

次に又、獨逸バーテン國ハイデルベルヒ天文臺からの報告によれば「月曜（八月八日）の夜から火曜（同九日）の朝にかけて、地球が何か或る彗星の尾の中を通つたらしい。明るく輝いた光帯が幾筋も、晴れた空を横切つて方向は西北西から東南東に延びてゐた。其の光帯は徐々東北北の方へ移動して行き、夜明になるに従ひ、色は次第に青白くなつた。彗星の頭が、地球と太陽との間を、南の方へ動いて行つたのだ。こんな現象は前から一度も起つたことはない、多分之れは、米國で八月七日の日没時に太陽の近くに見えたと同じものなのだらう」

右の三つの報告を綜合して見ると、此の不思議なものゝの正體は、ほど見當がつくやうである。報告にもある通り、之れは彗星なのだ

ろ。そして軌道は多分非常に離心率の大きい、しかも近日點距離の小さいもので、又偶然、我が地球は、此の彗星の近日點通過の頃



大彗星像圖

軌道の長軸の方向にあつたのだから、他の日には見えないで、星が近日點に近づいた頃だけ、強く輝いて見えたのだから。さにかく大彗星には違いない、光が金星を越え、又、尾の長さが、地球と太陽との距離（一億五千萬キロ）以上もあつたのだから。

天空には、時々、こゝろいふ素晴らしい闖入者がやつて来る。一九一〇年一月の大彗星も、こんな流儀で、発見は肉眼で行はれた。新星にしても、やはり、こゝろした突發的なものが少なくない。讀者諸君、暇さへあれば天を眺め給へ。肉眼でも決して失望するには當らない。

時々こんな大発見もあるのだから。（山本）

●皇太子殿下綠威天文臺に御成

近着報によれば、去る五月十六日午後、ロンドン御滞在の日本皇太子殿下が、閑院宮殿下、小栗司令官等と共に、グリーン非チ天文臺に成らせられた状況を報告してゐる。此の日同天文臺では、天文臺長ダイソン博士（第九代の勅任天文博士）は臺内の八角堂に殿下を御迎え申し上げ、臺員ジョンス、ジャクソン諸氏も其の席に欠した。殿下を始め、一行は天文臺の設備及び事業について、大に興味を起し給ふたさある。

●天文學術語の選定

開くところ

よれば、學術研究會議天文學部では、近々日本語の天文學術語の撰定協議をしようといふ意見が纏まりかけてゐる由。天文語については、先年、東京天文臺で定めたのがあるのやうであるが、未だ發表した表向きのものでない。これについては邦語の天文學書を書いて、講義したりする者は、國內に一定の約束が無いため、時々困ることがある。殊に常々の實際問題として、最も頭をなやまし、且つ經驗してゐるのは「天界」や「天文月報」のやうな雑誌の編輯に従事する者である。學術研究會議では、特に右のやうな實際家の意見及び經驗を尊重せられんことを望む。

●小遊星ヴェスタ見ゆ

木星と火

星との間に年々新発見が増加しつつある小遊星は、殆んど總て、光が弱くて、相當な望遠

鏡なしには観ることが出来ないものであるが、其の中で第四號星、即ちヴェスタ（Vesta）だけは、時々、衝の近くで、肉眼に見えるやうになることもある。今年度、ヴェスタの衝は十一月十一日で、目下、牡牛座から鯨座あたりを逆行してゐる。位置は別圖（第二四五頁にあり）の通り、但し光が充分でないから、双眼鏡で觀望したらよからう。

ヴェスタは、小遊星中で第四番に発見された星で、其の日は一八〇七年三月二十九日、発見者は獨逸ブレメンの醫者オルベルス（Olbers）であつた。肉眼で見える唯一の小遊星で、太陽からの平均距離は二・三六二（天文單位）公轉週期は三年と三十五日、離心率〇・〇八九の楕圓軌道を以つて、黃道に七度八分傾きながら、巡つてゐる。パアノ教授の觀測によれば直徑は二百五十哩であるから、セレスやパラスよりも小さいけれど、光りが強いところから見るに、アルベドは無類に大きいに違ひない。小遊星は元々大きさが考へてゐたが、此のヴェスタを発見して、益々其の自説を熱心に主張したといふ。

●臺灣の月帶食觀測

十月十七日朝

の月帶食は黎明四十分中の觀測で逆も好果は得られまいと思つたが比較的鮮明に午前五時十四分西天に傾く有明月の上右の間により虧け初め刻一歩蠶食し同三十七分に三分五厘の蝕の頃濃厚なる霧圍氣の中に包まれ遂に月沒の帶食五分までは觀測する事が出来なかつた。（會員見元了氏報）